民衆の内部の敵を批評する人

――中村藤一郎詩集『神の留守』に寄せて

鈴木比佐雄

1

中村藤一郎さんは、私の住む柏市に隣接する野田市に暮している。文芸誌「野田文学」の仲間である鈴木文子さんから「父のように尊敬する詩人です」と紹介された。昨年コールサック社から詩集『電車道』を刊行した鈴木さんは、今は我孫子市にいるが少し前まで野田にずっと暮していた。鈴木さんの詩には、醤油の樽職人だった父のことが書かれている。私はそれらの詩を通して醤油で有名な野田の職人たちを畏敬する風土を身近に感じてきた。中村さんは一九四七年に野田で始まった第二次詩誌「旧式機関車」の同人となり詩作を開始した。その詩誌が終刊した後も、「野田部落」そして「野田文学」と地元の詩誌や文芸誌で詩作を継続してきた。

中村さんはこれだけの詩作のキャリアがありながら、詩集を出したことがなかった。たぶん会社を経営したり、野田市の商工会議所などの役職を歴任していたので、家族や社員や地域のことを中心にして自分のことはきっと後回しにしていたのだろう。中村さんから貸していただいた戦前の第一次「旧式機関車」の表紙や目次のコピーを読んで驚いた。その同人の中には昭和四年に「リアン」という詩誌を創刊した四人の創刊同人の一人の竹中久七の名や、佐藤惣之助と安西冬衛らの名を見つけたことだ。戦後の第二次「旧式機関車」の寄稿者の中には戦前の「詩と詩論」の近藤東や戦後の「黄薔薇」の永瀬清子など、すでに詩史に名を刻んでいる高名な詩人たちの名もあったからだ。「リアン」は佐藤惣之助の主宰した「詩之家」に属していた若き俊英たち渡辺修三、久保田彦保（椋鳩十）、潮田武雄、竹中久七の四名によって創刊された。私は以前、戦後の宮崎の詩誌「赤道」の中心的な存在だった金丸桝一に影響を与えた延岡の渡辺修三や鹿児島の潮田武雄のことを調べて、金丸桝一論を書いたことがあった。「リアン」の創刊同人の竹中久七が戦前から野田で出していた「旧式機関車」にも深くかかわり、野田の詩人たちにも影響を与えていたのだ。「リアン」については、中野嘉一『モダニズム詩の時代』や腰原哲郎〈「リアン」詩史――一九三〇年代――〉二冊の研究書に詳しく書かれているのでこの場では詳しく触れないが、中野嘉一は近藤東の考えを次のように紹介している。〈「リアン」詩運動について、「シュルレアリスムの後で来るべきプロレタリア＝リアリズムを追究するという全く相反した次元、ディメンションのものを止揚しようとした運動」〉であると評したことについて中野は近藤東が「リアン」の深い理解者だと語っている。戦後に非合法活動が合法化されて竹中久七が一九四六年にまとめた〈「リアン」通説――日本前衛詩運動史の一資料〉という原稿用紙一三〇枚もの「リアン」詩運動の歴史とその詩論は、中村さんの仲間であった「旧式機関車」同人の古谷津順郎が発行者となり、発行所は「前衛詩人連盟」という名で当時の野田町から刊行されている。戦前の「旧式機関車」は「リアン」と同じ昭和四年に創刊されたが、月刊誌だったことも

あり二年で終刊したらしい。つまりこのことは佐藤惣之助の「詩之家」を源流として「リアン」、第一次「旧式機関車」の詩的エネルギーが戦後の第二次「旧式機関車」に流れていったのだろう。

「リアン」八号から参加した岡田悦哉と岡田重正の兄弟が野田で家業を営んでいたこともあり、きっと竹中久七や藤田三郎とも親しく、戦後も「リアン」詩運動と連動した活動が目指されたのだろうと考えられる。

中村さんは戦後間もない混沌とした時代の中で、そんな岡田悦哉と岡田重正の兄弟が身近にいたこともあり、また戦地から戻った野田の興風会図書館員の古谷津順郎が竹中久七の詩論の良き解説者だったこともあり、それらの前衛詩人たちの詩論に影響されながら、自分も詩作を開始したのだった。野田の街には、中村さんのような会社の若き経営者達が詩文学を受け入れ、毎晩のように図書館で勉強会を開いたり、自らも創作者として参加する土壌があったのだろう。千葉の銚子と野田は首都圏の醤油の大半を生産していたのであり、戦後も経済的なストック

によって関係する多様な中小企業も増えていき、その中で経済活動以外の文学・芸術を大切にする風土が築かれていったのだ。千葉の市川が福田律郎の「純粋詩」の創刊によって戦後詩の出発点になったことは知られているが、同じ江戸川に沿った上流の街である野田で、戦前の前衛的な詩運動をした「リアン」の関係者や支持者たちが熱い詩の運動をしていたことを私は知らなかった。その意味でも中村さんの詩篇に中村さん個人の魅力と戦前の「リアン」や戦後の「旧式機関車」の試みを見出すことも含めて、強い関心を抱いたのだった。福田律郎の「純粋詩」は戦後の詩運動を切り拓いていった詩グループ「荒地」「地球」「列島」を生み出す母胎になった。戦前の「リアン」の詩運動は、直接的な影響は辿れないが、戦後の「列島」の詩運動の詩論を先取りし準備したのではないかと私は考えている。その意味では千葉の市川と野田は不思議な隣接性を感じさせる。

2

中村さんが戦後に初めて書いた詩は二章のタイトルにもなっている「二一天作の五」だ。

二一天作の五

そろばんの玉
鉄砲の弾丸

誰がやっても、二一天作の五
危機の一九四九

若い商人のジレンマ
老商人のイナーシャ*

生きているのが不思議だという
死ぬ奴は馬鹿だという

一人のいのち
社会のいのち

斜面に立つ個人
斜面に立つ社会

＊inertia（物理用語では惰性・慣性をいうが、ものぐさ、無力の意味もある。）

二章の十篇の冒頭にある中村さんが初めて戦後に発表した詩「二一天作の五」には、俳句の二物衝撃のようでもあり、シュルリアリストのような無関係のものを並列させて不思議な世界を作り出すところが感じられる。また個人と社会の緊張感が詩を生み出すためのエネルギーになっていたようだ。また竹中久七が一九四八年一月「旧式機関車」七号に執筆した「新定型詩論とその実践運動」は、きっと中村さんにも影響を与えたのだろう。竹中によると「詩の定型」は和歌や俳句のような静態的な韻律でなく、「一定の社会経済構成に於ける一定の詩の観念形態」を発見するために、非連像的連続・異質的連続な試みによって詩を動態化することを目指したという。このような「リアン」「旧式機関車」の詩運動は、戦後詩の多様な可能性としてもっと論じられるべきだろう。それはともかく中村さんの詩は、竹中久七の詩論に収まりきれない、人間の苦悩が秘められていると、私にはなぜか感じられるのだ。

「二一天作の五」とは辞書には今でも載っている珠算の言葉で一〇÷二＝五のことであり、また勘定をすることや物を半分ずつに分けることなどの意味がある。中村さんの子供の頃には割り算の九九があったという。中村さんは冷静に物事を眺めることを信条にしている方なのかも知れない。「若い商人のジレンマ／老商人のイナーシャ」は父子の世代の格闘をさらりと詩に滑り込ませている。また最終連の「斜面に立つ個人／斜面に立つ社会」という二行にも、社会に過剰な期待も失望もしていないで、むしろ個人と同じように社会も危機をいつでも迎えていることを洞察しているようなところがある。その意味で中村さんは人間が社会的な存在であることから逃げてはいけないことを物語っていて、小さな個人を踏まえて社会的な自己を詩作することの意味を探っていたように思われる。

次に二章の中にある詩「陶房」を読むと、中村さ

んが物作りの現場にいかに精通されていて、経営者でありながら一人の労働者として物と対話しながら物の美しさに感動しながら、詩作をしていることが理解できる。

陶　房

細工場の片隅に、粘土が湿気を保って、その幾種類かが成熟を待っていた。
無知な鉄たちは、その粘土の中で、平和に躍動をつづけていた。鉄たちは自由であった。
それらの粘土は、轆轤の上で躍らせられ、やがて一個の固体を象られた。太陽に曝され爐に送られた。
爐は、窒息しそうな雰囲気だった。黒い焔が颶風のように、粘土の塊に触れ、天井から、地の底へ、囲み、それらをおびやかした。
粘土からは、水分が離脱していったが、焔は、粘土自体の変態を要求していた。
粘土は次第にガラス化して来た。表面にあった鉄は、すでに老年期の赤褐色を帯びてしまったが、鉄は一本の手を失って、ガラスの間隙に、意欲的な青色をもって、封じられた。
爐を出た茶碗は、球の象であった。その球の中には、三角や、五角やがあった。その球には永遠の安定が与えられていた。
青い鉄は、青い鉄の詩を、赤褐色の鉄は、赤褐色の詩を、歌うのであった。
中村さんは物造りを愛していることがよく分かる。土の中から搾り出されてくる鉄が青色や赤褐色となって陶器の肌を美しく装飾する。その過程が赤子を生み出すように描かれている。職人が丹精込めて造り出すことへの感動がなければ、このような詩は成立しない。それは職人が生み出す生活の必需品でありながら、装飾性においても生活の美を楽しむ心を示唆しているようだ。中村さんの詩には物を語るリアルな労働現場の詩でありながらも、物を生み出す職人が美意識に問いかけられながら、物と共に生きようとする瞬間を記述しているように思われる。また中村さんは「リアン」の目指した形式主義とシュルレアリスムとプロレタリア文学の高度な融合という課題を無意識の内に「旧式機関車」の同人として担おうとしていたのかも知れない。その意味では二章の戦後間もないころに書かれた作品は、果敢な実験的な作品だと考えられる。

3

次に、中村さんの「野田部落」や「野田文学」で書き継いできた作品を紹介したい。第一章「むかし戦争があった」には八篇があるが、どれも戦時体験が書かれている。国内がどのように戦争が準備されていったかを中村さんの詩篇は伝えている。中村さんの十代後半の青春時代はその最も不幸な時代に重なっている。

雨

生徒達は、ただ黙って歩いていた。鉄砲の銃身が白く光って、ゆれながら進んでゆく。たしか昭和十六年七月六日の夜の事だ。生徒達は、校庭に整列したとき聞いたM教官の鼻にかかった声だけが頭にこびりついて歩いていた、いくら雨が強く降っても流れはしない〝傘をさして歩くのは支那*の兵隊だぞ！　雨合羽なぞ置いて行け！　只今より出発！〟
帽子からも、鉄砲を担った肘の先からも雨だれが流れ落ちる。編上靴の中で水と靴下と、ふやけた足が、ぶよぶよ、ぎゅうぎゅうしている。越ヶ谷、草加、千住、上野、白い洗い流された夜の舗装道路の上を、日本の生徒達はへそまで濡して歩いている。〝支那の兵隊じゃないんだ、日本の青少年学徒だから、濡れているんだ、濡れてもいいんだ、濡れているのがいいんだ、濡れて、ずぶ濡

れで歩いているから僕達は英雄なんだ〟と。
それから間もなく、あの戦争になりました。
＊インド仏教が中国に伝わる時に経典の中国を示す「チーナ・スターナ」を「支那」と音写したことに由来するといわれる。江戸初期から第二次世界大戦末期まで日本人は中国のことを「支那」と言っていたが、戦後は一九四九年に成立した中華人民共和国が中国と呼ばれるようになった。

一九三一年の満州事変、一九三二年の上海事変によって日本は中国との泥沼の十五年戦争に入り込んでいった。「支那の兵隊」とは違うのだという軍事教官の言葉は、中国大陸で日本軍が中国の民衆をいかに愚弄していたかを明らかにしている。なぜ雨に濡れて歩くことで日本人の優秀性を語れるのかが、今となっては不可解だ。けれども若者たちを軍人に志願させるために「支那の兵隊じゃないんだ、（略）ずぶ濡れで歩いているからぼくらは英雄なんだ」という思いにさせていくことに中村さんは国家の戦時体制の恐ろしさの真実を伝えている。中村さんは戦争責任を国家や軍部だけに押し付けて、民衆の責任を不問にしようとは考えない。自分もそこに加担したことを直視しようとする。民衆の一人であった中村さんは、国家・軍部が他国の民衆を軽蔑することによって自国の民衆を排他的な愛国心に洗脳させていく過程を雨に濡れた肉体の記憶によって暴いている。

次の詩「本所・深川の乙女たち」もまた他国の民衆を殺戮して兵士を育てる戦時体制の本質を抉り出すだけでなく、空襲・空爆による無差別殺戮の戦争の悲劇を語っている。

本所・深川の乙女たち

いつ頃からか夕食時に少々酒を飲むようになった
いまでは　習慣になってしまっている

あの頃　毎週二日　午後は学校教練
藁人形に向って　剣着きの三八式歩兵銃を構える
と
配属将校小池中佐の声高な叱咤

「そんな事で　人は殺せんぞ！」
「体ごとォ　体重を掛けて突く！」
「刺したらァ　すぐ抜く　時を置くと抜けなくなるぞ！」
「ヨシ！　刺突（しとつ）＊！！」

薔薇の葉についた油虫に　殺虫剤をスプレーするように
ボタンを押して　巻き散らされた焼夷弾に
焼き殺された　本所　深川の町工場に働いていた
乙女達
巻舌で早口のお局様　金井静子
目玉の大きな　笑うと八重歯がこぼれる　伊藤キヨエ
色白で　コロコロしていた　栗原美代子
腕の立つ職人肌の　椿井章子
昼休み　窓にもたれてリストのハンガリア狂詩曲を毎日聴いている　鳩胸の　藤森歳枝
お正月には日本髪結って　コケットな　東美代子
まだ十六なのに世話女房のような　佐々木久子
机の引き出しへ置き手紙をして退社していった
中野桃子
笠井よし子　権平千代子　などなど
それから　工場長の可愛い末っ娘　小学六年生
だった　内藤典子も

仁平光太郎の労作「三十年目の手紙」には
「戦争って普通の人が鬼になってしまうのね」
と真沙子のことば

近ごろ　私の晩酌の量が　徐々に増えている
遠くで雷がなっている
＊陸軍の軍隊用語で刺せという意味

藁人形を銃剣で「刺突」する軍事訓練をこれほど短い言葉で正確に描いている詩はないだろう。この学校訓練を拒否したら非国民と若者たちは烙印を押されて、抹殺されていったのだろう。家族や故郷の人間関係から抹殺されることは、若者たちには耐え難いことであり、家族や故郷のためにと誓って戦争

に加担していったのだろう。中村さんは今では辞書にもないこの「刺突」という言葉をあえて詩に書き残し、自分たちの世代が背負わされた時代の苦悩を後世に伝えようとしたのだと考えられる。またそのような中国侵略の帰結として東京大空襲が繰り返されて、中村さんとも親しかった深川の町工場の乙女達の固有名を詩に刻んでいったのだ。私にはこの乙女達の固有名を読み継いでいると、三月十日だけでも二時間半で十万人以上が亡くなったのであり、その一人ひとりが「色白で　コロコロしていた」栗原美代子のように固有名を持ち戦時下でも精一杯生きていたのであり、決して焼き殺されてはならない存在だったのだと中村さんの鎮魂の思いが響いてくる。戦後に平和な時代が続いても中村さんは、晩酌する時に、戦争で死んでいった同世代の若者たちを想起し続ける。そして戦争とは若者たちをどんな悲劇に引き込むのかを決して忘れてはならない記憶として詩作しようと、一章の八篇を書き記したに違いない。詩「むかし戦争があった」では、中村さんが一九四五年の九月に復員してきて深川猿江町の恩賜公園内にあった墓標に「栗原美代子」の名を見つけた時は、どんな思いだったろうか。その思いを中村さんは決して語らない。戦争の被害と加害の深い傷跡を当事者たちは「話はしない」と指摘している。中村さんは民衆の内部の敵を批評しそれを直視しようとしているのだろう。だから中村さんの詩篇はその内部の敵を抉り、語り継がなければいけないという、敵味方の憎しみを超えた静かな決意のような清々しさを私は感じるのだ。

4

第三章「精一杯生きた母に」十五篇は、中村さんが戦後生きた時間が濃密に凝視されている。鳥や草花や山などの自然を語っていても、中村さんは人間を語らずにはいられないようだ。「立春」のような場末の飲屋の話もとても味がある。

立　春

客のひとりもいない場末の飲屋で

午前二時の練炭は
ようやく、冷えきった俺のつま先を暖めているが
胴っ腹のふるえるのを、どうしょうもない
つめたくなった
水っぽい酒を
コクリと
つまらない音立て飲んで見ても、聞こえた話は、
　消えやしない

結婚するなら寒い時がいいぜ
体が汗ばむような日は
風邪引いているような、熱っぽい日は
結果的に、うまくないな

T子の家に
テレビがあろうが
電気冷蔵庫があろうが
T子が幸福だっていう証拠にゃなりやしないぜ
T子に子供が生れなくたって

そんなこと、俺の知ったことじゃないんだ
T子が
いくら、いいきもの着たって
そんなこと俺のせいじゃないんだ

俺は
だから
結婚するなら、寒い日がいいぜっていうんだ

胴腹が、がたがたふるえている
歯が、ガチガチ音させている
寒い午前二時の飲屋で
あいつが
ほんとうに、しあわせなら
俺も、それがいいんだ。と俺にわからせようとし
　ているんだが

煉炭の火がもう消えそうなんで
炭をついでくれ
炭をついでくれ

寒くて、歯が、胴っ腹が
俺ががたがたしていて、しょうがないんだ

この詩を読むと中村さんが、とても人間通だということがわかる。「結婚するなら寒い時がいいぜ」というフレーズがさりげなくしかも含蓄がある。お互い必要に迫られ肌を寄せ合わせたい時こそ、一緒になる時であり、それ以外の時は止めといたほうがいいと告げている。財産があるとかそんなことではなく、恋する若い男がいま寒くてしょうがなく、いまこそ結婚すべきときなのだと若い女に告白している詩のように私には感じられた。何か青春の真っ只中で結婚すべきか迷っている若者が、人生を賭けて恋人に告白しているような初々しさを思い起こさせる魅力的な詩だ。中村さんの詩には、年齢を超えた若さが詩に貫かれている。戦争で亡くなった多くの仲間たちを思い、共に生きているから決して年をとることがないのかも知れない。また戦後に「旧式機関車」で戦後詩の実験的な試みをした仲間たちの詩的情熱も忘れることがなく、いまも「詩之家」「リアン」の詩人たちとも語り合っているのだろう。そして「野田部落」「野田文学」の仲間たちにも感謝をし、詩を書き続けている。

第四章「神の留守」は一行詩をあつめたものだ。そのタイトルの「鰯雲おとこはひとり神の留守」は何を語っているのだろうか。「神の留守」に鰯雲を眺めている男が一人いるのだ。「神」とは入院中の奥さんとも取れる。また詩作の師であり野田の歴史を小説化した「ひいらぎやノート」の岡田悦哉とも取れる。いずれにしろ中村さんは敬愛する存在を感じながら、鰯雲を眺めて詩作を続けていくのだろう。

そんな息の長い長距離ランナーの詩篇を野田の街の文学仲間だけでなく、全国の多くの人びとに読んで欲しいと願っている。